

最高指導者になる人物の発言を記事にしなかつたのなら報道機関として自殺行為である。

安倍論文の尖閣紛争への姿勢にも問題がある。南シナ海は旧ソ連時代のロシアにとつてオホーツク海がそうであつたように「北京湖」になつてしまふ恐れがあるとして、もし日本が（尖閣諸島問題で）屈するようなことがあれば、南シナ海はさらに要塞化されてしまふだろうという論旨を展開している。これでは尖閣諸島をめぐる中国との対峙がまるで南シナ海を取り巻くアセアン（東南アジア諸国連合）諸国のための代理行為のように読めなくもない。日本経済の死命を制するシーレーンが通つていゝと言え、南シナ海の現状維持が日本の自衛権の範囲に収まるとは到底考えられない。

安倍氏は最後に、日中関係は「日本国民の幸福にとって死活的に重要」だが、「日中関

係を改善するためには、日本はまず太平洋の彼岸に錨を下ろさねばならない。なぜなら、結局のところ、日本外交は常に民主主義、法の支配、人権尊重を根本にしなければならぬからである」と述べている。これはまさに福沢論吉の脱亜入欧論と同じ発想であり、中国は反発せざるを得まい。たとえ中国が現実人類社会の普遍的価値を実現していないからと言って、建前としての価値観自体を否定してはいないのである。

山口二郎北海道大学教授（現代政治論）はかつて、ナショナリズムが高まれば高まるほど日本はアメリカに頼るしか道がないという隘路に追い込まれるという矛盾を指摘した。安倍首相が祖父、岸信介元首相と同じようにこの奇妙なねじれ現象の犠牲にならないよう祈りたい。

## 共産党人生の徒然 (4)

——日本共産党内の「派閥」？——



篠原常一郎

ジャーナリスト

元日本共産党国会議員秘書

「人間的いがみあい」のドラマが

尽きない共産主義運動史

最近、兵本達吉さんが二〇〇五年にものした著書「日本共産党の戦後秘史」（産経新聞社）を読みました。二〇〇五年というと私が日本共産党を除籍された翌年なのですが、兵本さんは私にとって国会秘書の先輩でわずかな期間ですが党内での付き合いがありました。

国会議員秘書として北朝鮮による日本人拉致問題の追及に打ち込んでいた方なんです。が、一九九八年に「警察に退職後の再就職を依頼した」なんて分かりにくい理由で除名処分になっていきます。「あいつなら、やりかねない」なんて口の悪い他の先輩秘書が言っていました。が、どうも不可解な印象を持っていました。というより、北朝鮮による拉致問題を取り上げたこと自体が「指導部」（党中央委員会）で不破氏を指す隠語ですの覚えよ



しくなく、「本当の理由は違うな」と腹の底では思っていましたね。

まあ、兵本さんの問題は本題ではないので、また触れる機会があれば取り上げることとしましょう。

この『日本共産党の戦後秘史』はなかなかの労作で、埋もれていた史料や証言をもとにいわゆる「公式党史」（共産党が編集・発行して市販する『日本共産党の80年』のような）では書かれていない「50年問題」（※1）の本質や、それに付随した共産党関係の暴力事件、その他の歴史的出来事の中での党幹部たちや党全体の動きが生々生きと再現されています。兵本さんは年齢的にも私より20歳以上年長ですし、日本共産党に入党し、末端の党支部で活動していた時期がかなり違うので実際の活動体験もその中で形成されてきた黨員としてのアイデンティティーも相当異なっています。

す（まだお互いに現役の国会秘書として言葉を交わしたときにも、そう感じていました）。

北朝鮮による拉致問題で言うなら家族の突然の失踪、それが北朝鮮による乱暴な対日工作による拉致によるものとの疑いが濃厚になる中、純粹に家族の悲しみと拉致被害者奪還への強い思いから取り組んだ自分の仕事、党から正義とみなされず不本意にも追放されたという悔しさ。また、数十年、自分の人生をかけて積み上げてきた黨員としての生活。これを振り返り総括する作業として兵本さんは歴史に埋もれた日本共産党の真実を確認しよう、この労作に取り組んだのでしよう。

「歴史に埋もれた」と私などが言ってみても言葉足らずにしか聞こえないでしょうが、実際は日本共産党がその歴代の最高指導部（特に宮本顕治以降の最高指導者が君臨して以降）によって恣意的に押し隠そうとされて

きた事実の断片を拾い集め、ひっそりと暮らしている関係者を訪ねて確認していくという作業は、並みの根気とエネルギーでできることではありません。執念といってもよいでしょう。私も数年前に自分の黨員生活を中心に振り返る著書（「いますぐ読みたい 日本共産党の謎」―徳間書店）を出しましたが、ごく軽い読み物風のもので、厳しい歴史に斬り込んだこの労作には及びません。本稿の読者の方々にも、ぜひ兵本さんの労作をこー一読いただきたいと思えます（文庫版も出ています）。



しのはら じょういちろう  
1960年東京生まれ。立教大学文学部卒。79年、日本共産党に入党。85年に党専従となり、豊島地区委員会、東京都委員会勤務を経て、95年から03年まで党中央で国会公設秘書。04年、党総務部長。その後、民主党衆議院議員政策秘書を経て、現在、ジャーナリスト。著書に「いますぐ読みたい 日本共産党の謎」（徳間書店）がある。

さて、前ふりが長くなってしまいました。兵本さんの労作を読んで思ったのは、日本共産党の俗な意味での「人間くささ」です。

民主集中制という「鉄の規律」を標榜する共産党も、結局中央委員会以上の指導的幹部たちは本質的には人間的な相性で徒党を形成し、時にグループ同士、あるいはそのトップに立つ幹部同士の感情的対立から「路線論争」の形をとった抗争が引き起こされるんだな、と文章を読みながら認識しました。「50年問題」の際に国際派と呼ばれた宮本顕治、主流派の徳田球一との間の対立も、結局のところ出自の違い（山口県出身のインテリと沖縄県出身のたたき上げ闘士）とそれを背景とした気質の違いがベースとなった感情的いのみあいの域を出ていません。

それなのに「勝利」した側に都合よく後付



けの理論で粉飾され、「自主独立の立場を守り、極左冒険主義を排した」宮本側の正しさという形で「総括」されているのが「公式党史」です。何も日本に限らず、ロシアでも、また19世紀のマルクスの時代でも共産主義運動の歴史にはこうした「人間的いがみあい」のドラマが尽きません。

※1 「50年問題」とは、朝鮮戦争が勃発した一九五〇年前後にレッドバージなどの弾圧事態を受けた共産党が宮本顕治らを中心とする国際派と徳田書記長らを中心とする主流派に分裂し、非合法的な暴力的闘争を展開した時期の諸問題を指す共産党の規定です。現在、徳田ら主流派が「極左冒険主義の武装闘争を行った」と宮本の系譜を引き継ぐ現党中央は説明しています。が、兵本さんは著書でこの時期を「武装蜂起の時代」と呼び、ソ連、中国両共産党の指令を受けて日本共産党が実行した朝鮮戦争に呼応しての後方擾乱戦だと説明されています。じっくり理解できますね。

「東大閥」はないが「立命館閥」はある？

党大会や中央委員会総会の決定で「満場一致」が繰り返される「一枚岩」の党体質が知られながら、かねてより共産党は、外部から「派閥や分派がない」と言い張っているけど、幹部は東大出身者ばかりじゃないか。東大閥はあるはず」などと言われることが多かったと思います。私も、現職の共産党国会秘書時代から、酒席で同じようなことをよく聞きました。もちろん、党を追放されてからもよく尋ねられますね。

こうした疑問は、半分くらいは真実を言い当てていると思います。半分というのは、私の知る限り「東大閥」というものは共産党内に存在しないからです。では、後の半分（つまり当たっている部分）は何かというところ、特定の大学、はつきり申しますと立命館大学出身

者の「立命館閥」（※2）というものはあると言ってよいと思われるからです。

今回は、少し具体的な人物にもご登場願うことにしましょう。例えば、立命館大学出身の共産党幹部には、どんな人がいるでしょうか。

まず、第一に挙げることができるのが、参議院議員で党書記局長の市田忠義さん。この人は、立命館大学法学部を卒業した後、教職員組合専従を経て一九八八年から共産党京都府委員長を長く務めました。学生運動、労組活動、そして党の地方幹部として京都地方に人脈を広げ、大きな影響力を及ぼすようになりました。

二〇〇〇年に志位和夫さんが党書記局長から党委員長に「昇格」とすると、後任として市田さんが書記局長に就任したのです。参議院議員への当選は、その二年前の九八年でした。

次は、穀田恵二さん。党常任幹部会委員で最高幹部の一員であり、次は引退しますが衆議院議員で長く党国対委員長を務めました。立命館大学文学部卒業後、学校法人立命館の職員を経てから党専従となり京都市議会議員に当選（一九八七年）。一九九三年には衆議院議員に当選し（中選挙区）、その後は小選挙区では当選できないものの比例復活で当選を重ねてきました。この人は、その後「立命館閥」に絡んでちょっとしたスキャンダルを起しますが、何とか首がつかっています（笑）。このことは、後述します。

また、中井作太郎さん。党常任幹部会委員、書記局次長で後述の大幡さんから引き継いで党中央選対局長を務めています。立派な最高指導部の一員ですが、この人は市田さんから引き継いで長く共産党京都府委員長を務めました。立命館大学出身（学部は不詳です）。



大学、党職員・幹部の両面で市田さん直系の後輩筋ですね。

更に、大幡基夫さん。この人は、立命館大学経営学部を卒業後、民主青年同盟の専従となり、同大阪府委員長を経て共産党大阪府委員長を務めました。最高指導部である党常任幹部会委員となり、二〇〇〇年の総選挙で衆議院議員に当選しますが、持病のために二〇〇三年総選挙に出馬せず議員引退。その後、長く党中央の選挙・自治体局長(全国の選挙闘争の事実上の責任者)を務め、現在は局長を外れたものの国民運動委員会(※3)副責任者で常任幹部会委員、更に書記局次長となっています。引き続き、最高指導部の一員ですね。

「え、これだけ？」なんて言わないで下さい(笑)。小たりとはいえ、いまだ数十万の黨員を有する公党の最高指導部、たった23人しかない中央常任幹部会委員のうち、4人

も立命館大学出身者が占めているんです。ちなみに、常任幹部会委員のうち、東京大学出身者は「共産党天皇」とでもいうべき不破哲三さん、志位和夫さん(委員長)、笠井亮さん(衆議院議員)くらいです。

※2 今回は立命館大学出身者の党幹部について取り上げていますが、実は立命館大学の経営側にも共産党は大きな影響力を持っています。同大学が地方への進出を企図する中で、当該地方の共産党組織や議員、地元住民と紛争を起こしていることにも関与しており、問題だと考えています。いずれ調査の上、取り上げたいと思います。

※3 共産党中央委員会にはいろんな機構がありますが、国民運動委員会は国民各層の要求を汲み取り、その実現を図る運動を組織したり、それを通じて党と国民各層の結びつきを拡大し統一戦線の幅を広げたりするのが目的とされています。傘下に農林・漁民局とか、労働局とか平和運動局、基地対策委員会などがあります

けど、会議ばかりやっていて政策提案とか実際の運動でイニシアチブをとるなんて実態はありませんでしたね(笑)。

### 上下関係が形成され結束固い「立命館閥」

「立命館閥」が常幹内「東大グループ」(実際、「閥」と言えるような代物ではないので、ただの仕分けとして「グループ」を私は使います)に比べて全く異質なのは、その結束力と上下関係の形成ぶりです。前述した4人でも、はつきりと上下関係があつて、やはりトップは最年長であり、党活動家歴の長い市田書記局長ですね。

勝手な評価じゃないですよ(笑)。今までは、例えばかつての「ゼンボウ」(※4)に掲載されたような「日本共産党内人脈図」(そんなテーマがあつたと思います)とかの記事

であつた推測に基づく話じゃないです。こういうのを共産党内では「反共分子、反動勢力の妄想」などと言って嗤っていたものですが、今回私が書いているのは、ここに挙げた人たちのごく身近にあつた者として受けた印象とか、細かい事実の積み重ねから得た私なりの見方に基づいています。まあ、中央委員会からすれば私なんぞは歴代「反共分子」といわれてきた人たちと比べても人後に落ちない者でしょうけど(笑)。

ともかく、「立命館閥」における上下関係の特徴は、上の者がかつて下の者を指導する立場にあつたということに基づくことです。例えば、穀田さんは京都市議会議員をやってる頃から、ずっと京都府委員長の地位にあつた市田さんの直接的な指導下にありません。ですから、国会議員としての当選が早くても(市田さんが一九九八年なのに対し、穀



田さんは一九九三年)、京都府時代からの幹部としての格は市田さんが断然上です。だから、絶対に穀田さんは市田さんに逆らいませんし、実際、唯々諾々でしたよ。

また、学生時代から形成されるヒエラルキーですから、位階が年齢にほぼ比例するということ。これは党内肩書が一緒の場合ですね。例えば、大幡さんは中井さんよりも早くから党中央に行き、国会議員もしており、中井さんは非国会議員なのですけれども、大幡さんが学生時代は中井さんの方が年上で(61歳で大幡氏より3歳年長)、先輩であり同時に学生党組織の中では位が上です。それに、大幡氏は大学卒業後に民青同盟中央委員会に転出した後、共産党大阪府委員長などを歴任しますが、あくまで立命館大学の地元である京都府からは離れていましたので、京都府委員長を市田さんの後に引き継いだ中井さんよ

りは下、ということになります。

まあ、こんな感じですよ。もちろん、ここに挙げた4人よりも立命館大学で党員として先輩、更には先に党専従になった(例えば京都府下の党地区委員会など)という人もいるでしょうが、そこは党内肩書が優先されて党中央や国会議員になった人の方が上ということになります。

あと「立命館閥」で面白いところは、国会議員になった場合の秘書を含め、自分のすぐ下の部下には同じ立命館大学出身の後輩党員を置きたがることです。いわゆる国会秘書ではない日程や運転その他雑務管理の地元秘書(京都などに配置)は、たいていそうでしたね。この方が大学時代の「先輩、後輩」関係のように上の者のわがままが利く。国会議員は地元秘書をけっこう怒鳴りつけたりしていて、傍から見て「ひどいなあ」と思ったものですよ。

また、「立命館閥」を中心にして「京都グループ」的なものが何となく成立していたりしていましたね。市田さんや国会議員を中心に飲み会をやっていたりして(筆坂さんが二〇〇三年に失脚する以前で、上級機関に届け出をして許可をとった以外は「外部飲酒」が党中央職員や議員たちに原則禁止されていた時期のことです。「筆坂事件」後、外部飲酒禁止令は廃止されました)、何かとつるんでいました。

まあ、公人だからバラしても許容してもらうしかありませんが、市田書記局長は飲み会では得意げだったそうですよ。カラオケ・ボックスの中で京都府選出の女性議員に膝枕させて、ネクタイを頭に巻いて唄い踊っている別の男性議員に「○○○(議員の名前)、もつとやれー!」なんて叫んでいたエピソードが、国会秘書の中では有名でした。白状する

と私もこっそり吞んでいた「不良党員」のクチですが、この話を聞いたときなんか、「同じ共産党の中の話なのか?」とカルチャーショックを受けましたね(笑)。

※4 一九五二年に月刊「全貌」(後に「ゼンボウ」と改名)として創刊され、一九九八年五月まで刊行された共産主義・日本共産党批判を中心に記事掲載した雑誌。発行元の全貌社(現在はそうよう社)からは、共産党幹部批判や暴露ものの書籍も多数発刊されていました。共産党中央委員会料室に全部そろっていて、中央委員会に出かける用事があったとき、たまに閲覧していましたね(笑)。

#### 穀田議員「不倫疑惑事件」

#### の背景も「立命館閥」

以上のような「立命館閥」の本質を端的に露呈したのが、二〇〇六年十一月一日発売の



「週刊新潮」で暴露された穀田恵二衆議院議員の「不倫疑惑」です。これは、二〇〇〇年から二〇〇四年にかけて穀田さんの地元秘書を務めた早川幸男さんが、地元で穀田さんと妻以外の女性との密会を手引きさせられたこと、当該女性も夫、子どものある身でしたが、彼女から穀田さん宛の「熱愛メール」(週刊誌では「ラブラブメール」でしたね)が間違つて早川さんの許に送信されてしまったことなどが明かされたものです。

穀田さんは暴露に「激怒」して(実際は、根拠のない「セクハラ疑惑」で議員辞職・降格を強要された二〇〇三年の筆坂さんの事件が自分で再現されるのを恐れたのでしようが)、何と「週刊新潮」と早川さんを検察に刑事告発したのでした。天下の衆議院議員が直接訴えたのですから検察当局も困つたのでしようが、結局、形だけの調査をして「不起訴」としま

した。これでは却つて穀田さんをめぐる疑惑の真实性を証明したようなものです(笑)。

早川さんはこれ以前に「穀田さんの振る舞いはおかしい」と党内で告発していたのですが、「党幹部の身辺を洗うなんてけしからん」(早川さんが党内上司に言われた言葉)とされながら別件を理由に共産党から除名されていました。党を追放された者同士として、筆坂さんを交え私とも親交を結んでいますので、早川さんから事件の詳しい内容を聞ききました。週刊誌に掲載された以上にひどい内容なので、驚きました。

まず、早川さんが秘書として穀田議員の女性との密会を手引きさせられたのは、たまたま数回というレベルではないということ。話によると、「4年間、地元秘書をしましたが、月に二、三回は山中のデイト場所や休日で閉鎖されて無人の民医連診療所に連れて行きま

したよ。彼女が民医連医療機関の職員だったので」とのこと。

党の最高幹部(常任幹部会委員)の一員で国会議員でもある者が、党内の部下に異性と不正常的な密会の手引きをさせること、しかも密会場所に彼ら流に言うなら「民主団体」(共産党は事実上の党外郭団体、支配下の労組などをこう呼びますね)の事業所を使うなんてことは長年党専従をやってきた私には信じがたいものでした。前にここで書きましたのが、東京で党専従をしていた私の周辺では「不倫」を理由に党内査問や処分が起きていたくらいでしたから、「関西の共産党はモラルや文化が全く違うのか。いや、普通の社会であってもモラルの上で許されない行為だ」と、話を聞いた私はすっかり呆れてしまいました。

更に呆れたのは、この密会の手引きという「仕事」が前任者から早川さんに引き継がれた

ものだったということです。「これ(女性との密会)をさせておけば、穀田は機嫌がいいからね。ガス抜きだよ」と引き継ぎの際に早川さんは言われたそうです。実際、地元秘書として京都に戻ってきた穀田さんを駅まで自動車を迎えに行つた際は車中で早川さんは穀田さんからさんさん東京での国会活動上の不満

について、愚痴を聞かされたそうです。その上で、時には休暇も返上させられて女性との密会のための運転を命じられる。こんな仕組みが、前任者から引き継がれるということは、党組織(この場合、京都府委員会です)が穀田議員の女性との密会を公認し、これを積極的に援助していたということに他なりません。

なんでこんなことが起きるのでしょうか。早川さんによれば、「少なくとも自分については立命館大学出身の上下関係にしばらくは逆らいようがない。また、立命館大学出身の



党幹部はお互いにかばい合いもするんです」とのこと。

実は、殺田さんと早川さんの「主従関係」も「立命館閥」に根ざすものでした。早川さんより殺田さんは15年も先輩に当たるのですが、聞いたところをまとめると、次のように継続した関係があったそうです。

○ 八三年：早川さんが立命館大学の共産党学生党委員長の時、殺田さんは当該党地区委員会の選対部長。選挙運動に学生党員を動員する立場で指導・被指導関係ですね。

○ 八六年：早川さんが党地区委員会専従の時、殺田さんは京都府議補欠選挙に立候補するも、落選。党地区委員会でも先輩、後輩関係です。

○ 八七年：早川さんが民青同盟地区委員長

(専従)に転出しているとき、殺田さんは京都市議会議員選挙に立候補して当選。文字通り、早川さんは殺田さんの目下の関係が維持されています。

○ 九三年：早川さんが党京都府委員会青年学生対策委員会付きのとき、殺田さんは衆議院議員選挙に立候補し、初当選。なお、早川さんによればこの選挙で殺田さんとウグイス嬢を務めていた件の女性との親密な関係が始まり、それは周囲では公然の秘密だったとのこと(10年以上続いた関係ということになりませぬ)。なお、選挙後の同年七月から早川さんは京都府配置の「赤旗」地方記者になり、以後七年間にわたって殺田議員担当をします。

○ ○年：早川さんは党中央委員会の出先機関との位置付けである日本共産党衆院近畿ブロック事務所所属となり、殺田さん担

当の地元秘書になりました。その間、二〇〇二年には殺田さんのホームページ立ち上げをしたり、日程管理などの活動をしたりしますが、その間に女性との密会の手引きまでやらされ、すっかり嫌気がさすようになります。

○ 〇四年：密会手引きに不満を持つ早川さんに殺田さんが畏れをなすようになり、早川さんは党乙訓地区委員会に左遷されました。

○ 〇五年一月：突如、早川さんは査問を受けます。そして、四月頃に殺田さんの指示もあつて党を除名されてしまいました。

以上のように、殺田議員「不倫疑惑事件」の背景には、八〇年代まで遡ることのできる立命館大学での党活動を出発点にした殺田さんと早川さんとの上下関係が横たわっています。本来、日本共産党は「規約の前にすべての

党員は平等である」という原則をうたつていて、役員、非役員であることや所属機関や肩書の違いは世間的な上下関係ではないとされています。ところが、「立命館閥」では大学とそこでの党活動の上下関係、先輩・後輩関係が党生活に持ち込まれ、しばしば上の者が下の者に理不尽なことをさせるといったことが横行しているということです。

本質は「強いものに巻かれる」式の

俗人主義

「何も不正常なのは、殺田のことだけじゃないよ。もちろん、『立命館閥』トップの市田氏だって発覚前から殺田の不倫なんて知っていたし、自分だっているいろいろあるんだよ。お互い持ちつ持たれつですな(笑)」—早川さんは、こう語っていました。



党の規律以外の論理で、上の者の不正常な行動が許されてしまう。これが「立命館閥」の存在で共産党の中に現出してきたわけです。これを派閥、分派と言わずして、何なのでしょうか。

実際、「立命館閥」は党京都府委員会を軸にその権勢をいまだに誇っています。先日、市田忠義党書記局長、大幡基夫、中井作太郎両党常任幹部会委員らが呼びかけ人となつて、広く立命館大学二部OBに「日本共産党京都府委員会新築のための建設資金募金」の要請がされました（市田さんは立命館大学二部法学部出身）。こんなことを特定の大学出身者レベルでやっているのは、共産党では「立命館閥」しかありません。

振り返って「東大グループ」はどうか。はっきり言って、お互い信頼関係なんて無し。むしろ、不破さんによる志位さんいじめ、と

いった実態が知られているくらいです。党常任幹部会の会議での筆坂秀世さんの目撃談がその著書「日本共産党」（新潮新書）で紹介されています。

「こんなこともあった。私が罷免される一年前頃の時期だと記憶しているが、志位氏が議題のまとめをするたびに、不破氏が「僕は違うな」といつてひっくり返すのである。当然、結論も不破氏の意見に落ち着いていく。居並ぶ常任幹部会委員の前で、「君はまだまだだ」といわれているに等しいわけだから、これは志位氏にとってつらかったと思う。…これが週一回の会議のたびごとに繰り返されるのである。こうしたことが何回か続いた後、彼はついにまとめができなくなつてしまった」（100ページ）

結局、志位さんは神経に変調を来してしまつたのです。実は不破さんは委員長時代、

議長だつた宮本顕治から同じようないじめを受けてきたと言われています。志位さんは宮本氏が抜擢して書記局長に就任させた経緯があり、不破さんにとって「志位いじめ」は意趣返しといった面もあつたのでしようね。それにしても、宮本、不破、志位と三代にわたつた東大出身のトップたちの人間関係はこのような陰湿なものだつたのです。

一方、「立命館閥」以外には、人間的にふるんで他を排除したりといったことが党内に無かつたかという点、そんなことはありません。不破さんの「志位いじめ」に同調する輩もたくさんいましたよ。これは私も直接見聞しました。

市田書記局長はごく近しい者しかいない場では、志位さんのことを「あの若造」なんて言っていました。また、ある時、志位さんが国会での「ぶらさがり取材」（記者が歩いて

いたりする国会議員などを取り巻いて立ち話的にインタビューすることです）でまずい回答をして、それをテレビで見ていた不破さんが怒つて「バカな！」と吐き捨てたことがあつたのですが、以後、党本部の中ではテレビ画面に志位さんが現れると「バカな！」と口真似することが流行りました。陰湿でイヤでしたねえ（※5）。

また、一方では私を査問した浜野忠夫党副委員長のように、何を言うにも「不破さんはこう言つた、ああ言つた」式に何でも不破さんの権威で自分をえらくみせようとするような腰巾着もけっこういました。不破さんと直接話のできる浜野さんだけではなく、地区委員会レベルの幹部まで不破さんの著作をちょこっとかじるとそんな言い方をする者もいるので、参りますね（笑）。

いずれにしろ、日本共産党内（まあ、党専



従より上の部分については、「権威や強いものに巻かれる」式の俗人主義的な人間関係が横行しているわけです。それと出身大学とそこでの党活動歴が結びついて形成されたのが「立命館閥」というわけですね。

不破さんが高齢で衰えて、神奈川県津久井の山荘での「学究的」生活(ある人は、「マルクス盆栽いじり」と揶揄していますが(笑))にますます引つ込む中、市田さんをトップとする「立命館閥」は、党支配の面でけっこう力を増してきたと思います。この雑誌をお読みの「日本共産党ウオッチャー」のみなさんはどう思われますか？

※5 このテレビでの志位さんの様子が放映されたのは、二〇〇三年の「筆坂失脚事件」の際です。日本共産党が「筆坂氏は外部で飲酒し、その場でセクハラ行為があった」(当事者に近い私はこれが事実無根と断言できます)と発表したことに加え、志位さ

んは「日本共産党の規律である外部飲酒禁止を徹底したい」と身内向けにしかできないはずの発言をしてしまったのです。居合わせた記者から「え？共産党員はデートなんかしても、お酒を飲んじやいけないいきまわりがあるんですか？」と突つ込まれて志位さんは回答不能となりました(両面では「…」とテロップが流れ、見ている人たちは爆笑したそうです)。混乱していたんでしょうね。これを見て不破さんは「バカな！」と叫んだわけです。実際、党専従(特に都道府県委員会勤務以上)には外のお店で勝手に飲酒してはいけないとの規律が部内通達されていました。党本部にも飲食業者の支持者などから抗議が殺到したこともあり、外向けに「間違いです。そんな規律はありません」と言い訳しましたが、結局、外部飲酒禁止通達自体が廃止されてしまいました。以後、「♪今日もお酒が飲めるのはあ、♪筆坂さんのおかげですう」という替え歌が党本部勤務員の間で流行りました。この話が出ると、酒席で筆坂さんと私は大いに盛り上がります(笑)。

## アルジェリア人質事件を検証する

犯行グループの実態と情報収集における日本の課題

和田大樹

藤オオコシ・セキュリティコンサルタンツ・アドバイザー  
岐阜女子大学南アジア研究センター特別研究員

### 一 事件と犯行グループの実態

二〇一三年一月十六日早朝、アルジェリアの南東部・イナメナスにある天然ガスプラント施設を標的としたイスラム過激派による襲撃事件が発生し、日本人駐在員を含め多くの外国人が殺害された。この事件ではフランスや米国、英国、コロンビア、フィリピン、ノルウェーなど犠牲者の国籍は多岐にわたり、また九・一一同時多発テロ後、日本人が巻き

込まれたイスラム過激派によるテロ事件としては最も被害が大きかった。

この事件の背景にあった組織は、イスラム・マグレブ諸国のアルカイダ(AQIM)から分派したモフタール・ベルモフタール(Mokhtar Belmokhtar)により結成されたイスラム聖戦士血盟団(al-Muwa, qi, oon Biddam)であると考えられている。ベルモフタールは一九七二年生まれのアルジェリア人で、ムジャヒディン(イスラム聖戦士)としてアフガニスタンでのジハー